兵庫・姫路駅周辺第四地点遺跡（仮称）

1　所在地　兵庫県姫路市朝日町・駅前町

2　調査期間　一九九九年度調査　一九九九年（平11）七月～二〇〇〇年一月

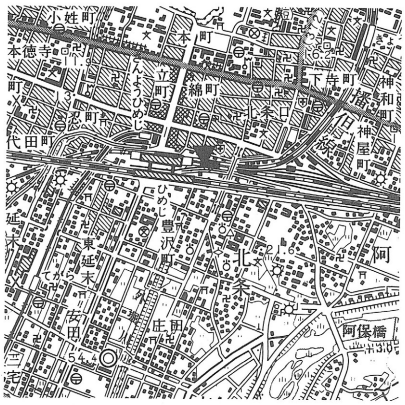
3　発掘機関　姫路市教育委員会

4　調査担当者　中川　猛

5　遺跡の種類　集落跡（平安時代後半）、城下町（江戸時代）、交通遺跡・姫路駅駅舎（近代）

6　遺跡の年代　弥生時代前期～平安時代後半、江戸時代、近代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要



（姫　路）

姫路駅周辺第四地点遺跡は、姫路市の中央に位置し、JR姫路駅構内に所在する。遺跡周辺には市之郷遺跡、市之郷廃寺、豆腐町遺跡、播磨国府推定地である本町遺跡などがあり、古くから開けた地域である。一九九八年度から引き続いて調査を実施している。今年度の調査は、第三遺構面を中心に実施した。古墳時代中期の流路、一六世紀代の流路、遺跡の東方を南流している市川の支流と考えられる河道、平安時代後半の井戸・柱穴・土坑などを検出した。また一九九八年度の調査においては、遺物包含層から、円面硯や播磨国府系軒丸瓦などが出土している。

木簡が出土した遺構は、平安時代後半の井戸である。二基の井戸が切り合う状態で検出された。二基の井戸に構築時期の差はあまりないと考えられ、古い方の井戸SE〇二から、木簡が出土した。井戸は二基とも一辺約七〇㎝、掘形直径約二m、遺構検出面から深さ約一mで底面に至る。井戸SE〇二の井側は、二隅に支柱を残すのみで、ほとんど残存しておらず、井戸の構造は判然としない。しかし、新しい方の井戸SE〇一には、井側が良好に残っており、方形縦板横桟支柱型であることから、SE〇二も、構造的に類似するものであったと想定される。井戸内の埋土は、上から大きく茶褐色粘土層・黄灰色粘土層・黄褐色砂層の三層に分層できる。木簡は、黄灰色粘土層から、白磁皿・土師皿・埚などとともに一点出土した。

8　木簡の釈文・内容

(1)　(125)×44×2　081

（符籙）〔鬼カ〕□

木簡は、上下とも折損しており、原形は不明である。内容から呪符木簡と考えられる。また、木簡と共に、竹筒が井戸底に刺さった

状態で出土している。土圧のため、竹の節が抜かれていたかどうかは、確認できなかったが、出土状態から、井戸の廃棄に際して、「息抜き」が行なわれた可能性が指摘できる。木簡もそれに伴って用いられたものと推察される。

なお木簡の釈読にあたっては、兵庫県立歴史博物館の小林基伸氏のご教示を得た。

（中川　猛）